

## 第3章

### 大阪市の現況と課題

- 1 大阪市の生物多様性の状況
- 2 都市における消費とグローバル化
- 3 直面している課題

### 第3章 大阪市の現況と課題

#### 1 大阪市の生物多様性の状況

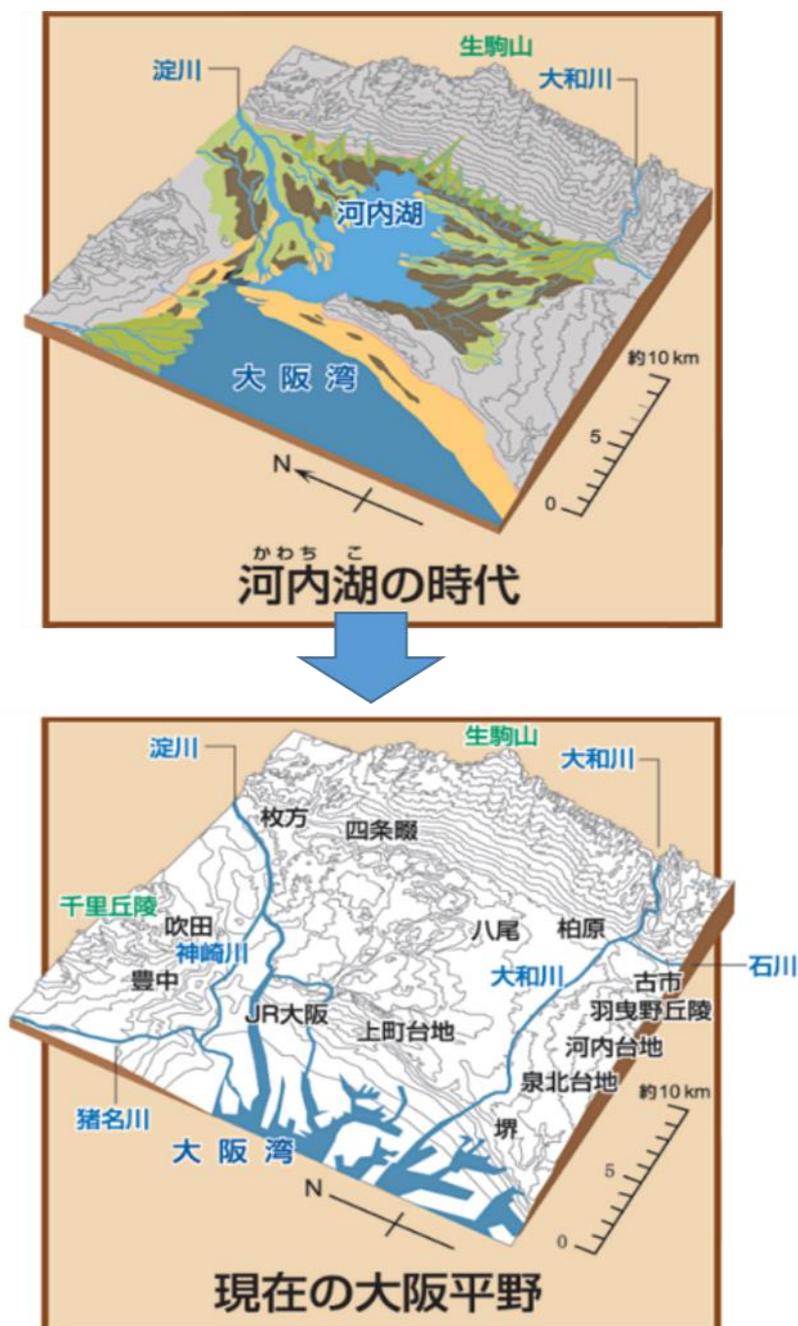
##### (1) 地勢

約6,500年前の大阪市内は、上町台地が南部から半島状に伸び、瀬戸内海と河内湾で挟まれた形をしていました。河内湾には、淀川と旧大和川が注ぎ込み、海退とこの二大河川の堆積作用により、弥生時代中期には河内湾は淡水の河内湖へと変化しました。

さらに、その後の新田開発や堀川の開削など人工的な干拓などによって、現在の大阪市域が形成されました。

現在の大阪市域は、中央部からやや東寄りを幅約2km、長さ約10kmで南北に縦貫している上町台地を除けば、平地が大部分を占めています。

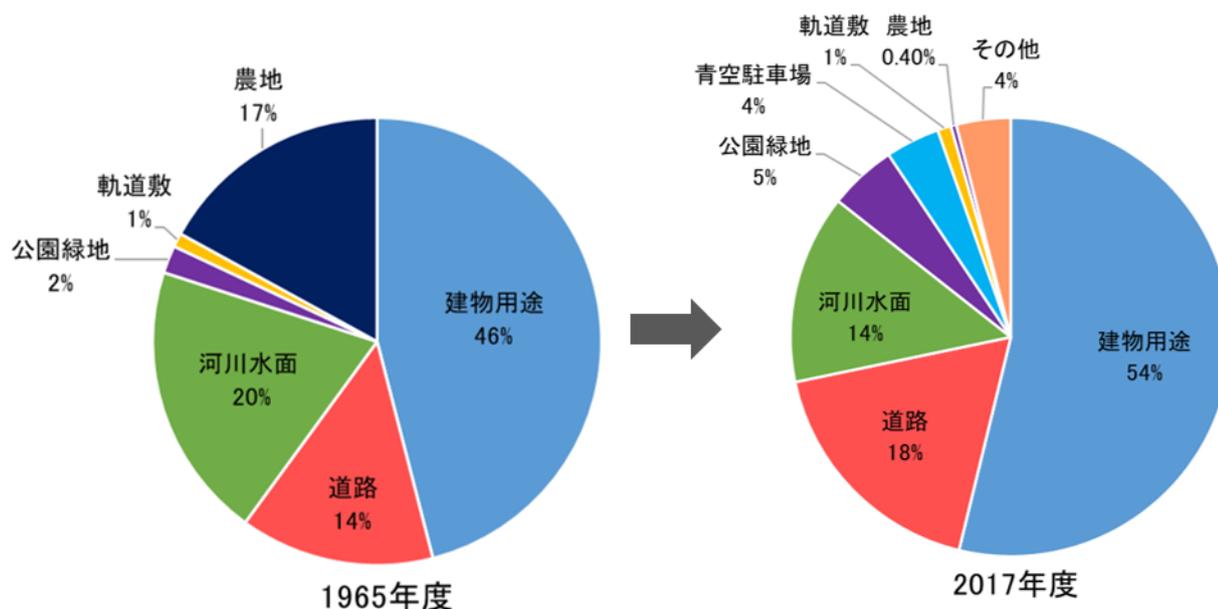
図1 地勢の変化



## (2) 土地利用の変遷

大阪市では、1965年度には建築物及び道路は全体の60%を占め、農地も17%を占めていました。その後、農地は減少し、2017年度には全体の1%未満となりました。また、河川水面が占める割合も1965年度の20%から、2017年度には14%と減少しました。このような中、公園緑地の面積は、1965年度には2%でしたが、2017年度には5%に増加しています。

図2 大阪市内の土地利用の現況



出典:「大阪市土地利用現況調査」より作成

## (3) みどりの現況

### (i) 市内の貴重な自然

大阪市は、市域の大半が淀川と大和川により形成された沖積平野に立地し、山林などの自然の緑には恵まれていません。そのような中で、上町台地や南部の寺社は、ヤブツバキやムクノキ、ウバメガシなど在来種を中心とした二次林が残されている貴重な場所となっています。このほか、淀川ワンド群など、ほぼ全域が市街地化された大阪市にも、大切な自然が残されています。

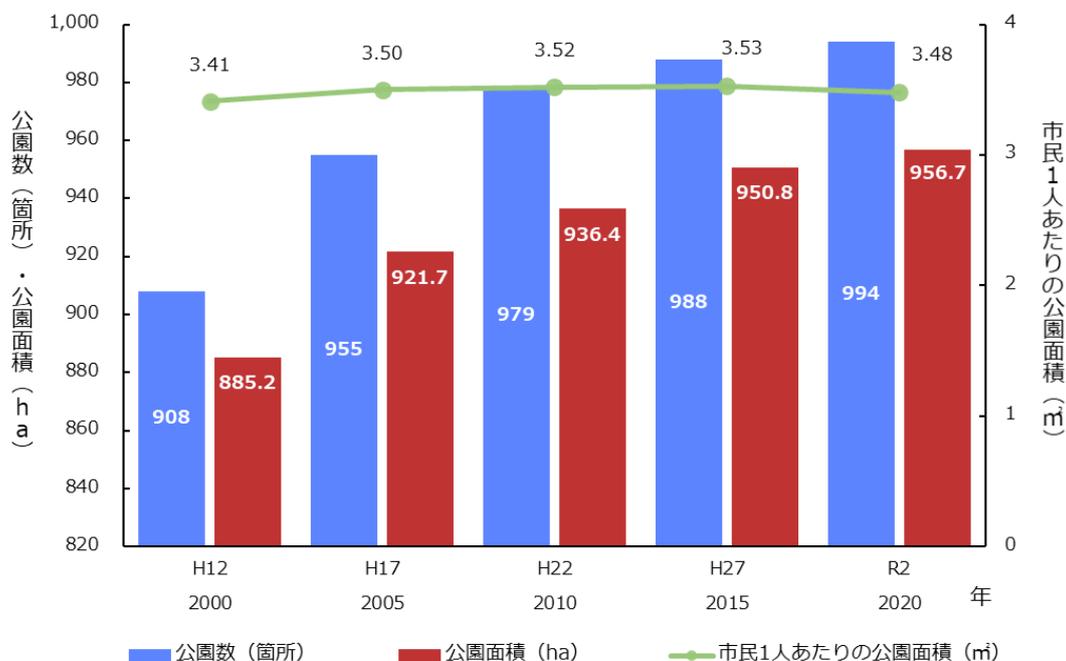
### (ii) 新たな生息・生育空間

大阪市では、都市公園や街路樹の整備を積極的に進めるとともに、公共施設の緑化や民有地の緑化を促進するなど、市民や事業者などと一丸となった緑のまちづくりを推進し、緑を生み出してきました。また、近年では、なんばパークスや新梅田シティの新・里山など、都心において屋上緑化や壁面緑化、雑木林のような緑地空間などの整備が進められ、新たな生息・生育空間が創り出されています。

(iii) 緑化の状況

大阪市の緑化の状況について、公園数、公園面積は着実に増加していますが、「新・大阪市の緑の基本計画」における目標については、成果指標（みどりのまちづくりの中で行政がめざす目標的な指標）とともに、概ね横ばいで推移しています。

図3 公園数、公園面積、市民1人あたりの公園面積の推移



出典：「令和2（2020）年度版大阪市環境白書」より作成

表1 「新・大阪市緑の基本計画（2013年11月改定）」における目標

指標	策定時	H37末目標	進捗状況
成果指標		基準値	めざす割合
身近な緑の満足度	46.5% (H22.12)	約60%	46.8% (H28.1)
緑が増えたと感じる人の割合	28.1% (H22.12)	約33%	28.0% (H28.1)
身近な公園の利用頻度 (週に1回以上公園を利用する人の割合)	35.1% (H22.12)	約50%	34.0% (H28.1)
達成指標		基準値	目標値
緑被率	約10.4% (H24)	現状以上	—
都市公園の市民一人あたり面積	3.51m <sup>2</sup> /人 (H24末)	約4m <sup>2</sup> /人	3.52m <sup>2</sup> /人 (H29末)

出典：「新・大阪市緑の基本計画」より作成

#### (4) 水環境の状況

「水の都」大阪を縦横に流れていた河川・運河は、かつて市内交通の動脈であり、大阪の産業を支えてきましたが、現在では多くが埋め立てられ、生活道路などに生まれ変わっています。しかし、現在でも市域面積の14%は河川水面が占めており、都市に残された貴重な空間となっています。中でも、淀川の汽水域には、矢倉海岸、海老江干潟、十三干潟、柴島干潟などの小さな干潟が残っており、ヤマトシジミやカワゴカイ類などの生き物が数多く生息しています。

また、淀川、大和川という二大河川が注ぐ大阪湾は、古来「茅渟（ちぬ）の海」とも呼ばれ、豊富な水産資源に恵まれたエリアですが、湾岸部では、埋め立てが進み、砂浜や磯、干潟などの自然環境は減少しています。

図4 大阪市内の河川



図5 大阪湾奥部における埋立状況



出典：瀬戸内海の環境保全 資料集（2020年3月）